

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 7 日現在

機関番号：12605

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520005

研究課題名（和文）「〈農〉の思想」の基本視座の現代的探求—環境・情報化社会の条件の下で  
 研究課題名（英文）Contemporary Inquiries of Fundamental Viewpoint Concerning the  
 Philosophy of Agriculture

研究代表者

尾関 周二 (OZEKI SHUJI)

東京農工大学・大学院農学研究院・教授

研究者番号：00114819

研究成果の概要（和文）：

本研究課題において、「〈農〉の思想」の基本視座を現代的な視点から探求した。研究調査を踏まえた理論研究をすすめ、その成果を著作物ならびに論文集にまとめた。同時に、中国や韓国の研究者との交流を通じて、本研究の協働性と国際的ネットワークを広げた。

研究成果の概要（英文）：

In this research task, it searched for the fundamental view of "philosophy of agriculture" from the modern viewpoint.

The theoretical research based on research investigation was recommended, and the result was summarized to a work and collected papers.

Simultaneously, the collaboration nature and the international network of this research were spread out through the exchange with the researcher of China or South Korea.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 21 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
平成 22 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 23 年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：環境思想

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：哲学、農、持続可能性、環境、情報

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者のこれまでの共生理念（また持続可能社会の諸局面）の探求の成果を踏まえて、今日、持続可能な社会の構想の理論的、実践的な探求のなかで〈農〉をめぐって生まれた新たな問題意識や問題圏が人類史における〈農〉の思想的文化的意義を踏まえた哲学アプローチを必要としている。

## 2. 研究の目的

主要な課題として「〈農〉の思想」の現代的構築のための基礎的視座を探求することを目指している。それはまた、古代ギリシアにはじまる「西洋哲学 (Philosophia)」の主流（プラトニズム）の伝統が真正面から問題にしてこなかった〈農〉の哲学的意味を現代的視点から考察することとなり、逆にまた「西洋哲学」そのものの再考にもなると思われる。

### 3. 研究の方法

現代的な「〈農〉の思想」の構築のためのベースになる視座と全体の骨格を明らかにするために、二つの視点からアプローチする。一方では、農学の諸分野をはじめ、環境学、社会学、経済学、歴史学などで学際的に〈農〉にもたれている現代的関心の所在を理論的に解明するために思想的に〈農〉の意義を論じている文献を収集し、その通観を通じて、哲学の立場から統合的にとらえる基本視座の探求を開始する。また、他方で、有機農業、地産地消、環境再生、村おこしなどのフィールドの調査研究を院生などの協力を得て国内外で行い、「〈農〉の思想」構築に関わって興味深い事例を通じて、理論研究への刺激とその裏打ちを求めていきたい。その際に、高度情報化と〈農〉とのかかわりの事例に特に留意して、調査研究を多面的に行っていく。

### 4. 研究成果

〈平成 21 年度〉

当該年度は、持続可能な社会の構想の理論的、実践的な探求のなかで〈農〉をめぐって生まれた新たな問題意識や問題圏が人類史における〈農〉の思想的文化的意義を踏まえた哲学アプローチを必要としているとの認識から、主要な課題として「〈農〉の思想」の現代的構築のための基礎的視座を探求することを目指して、理論的研究、調査研究を進めた。具体的な内容は、以下4点にまとめられる。

第一に〈農〉に関係する諸論文・著書の研究をふまえて、かなり長文の論文「〈農〉の思想と持続可能社会——共生理念からのアプローチ」を執筆し、基礎的視座を提起することができ、今後のより一層の探求に向けた大きなステップとなった。

第二は、以前にイタリアのMassimo Negrotti教授を招聘した際に発表した英文報告をもとに今回の〈農〉の研究の視点から改定し論文とした。

第三に研究室所属の院生（布施元、大倉茂、共に博士課程）とともに、〈農〉と環境教育の関係を専門に研究するAnette Schörner氏の協力のもとでドイツでの該当箇所について調査研究を行った。この成果は環境思想・教育研究会の「〈農〉の思想」部会にて大倉が代表して報告した。科研費テーマに沿ったドイツならではの思想に裏打ちされた調査研究をすることができた。

第四に中国社会科学院・哲学研究所副所長の孫偉平教授を招聘し、環境思想・教育研究会にて持続可能な〈農〉の思想的意義にかかわる講演してもらい今後の中国との国際交流

や中国での調査研究の足がかりができたと思われる。

以上、4点にまとめらる当該年度の具体的内容は、論文執筆に代表される理論研究によってテーマの手掛かりを得るとともに、ドイツ調査研究においてその理論の可能性を実感でき、理論と実践を連携して研究をすすめるできたことに意義があると考えられる。また、その理論と実践のかかわりを強調する一方、国際交流を進めることで、本研究の協働性に広がりが出てきたことが重要である。

〈平成 22 年度〉

当該年度は、持続可能な社会の構想の理論的、実践的な探求のなかで〈農〉をめぐって生まれた新たな問題意識や問題圏が人類史における〈農〉の思想的文化的意義を踏まえた哲学アプローチを必要としているとの認識から、主要な課題として「〈農〉の思想」の現代的構築のための基礎的視座を探求することを目指して、理論的研究、調査研究を進めた。具体的な内容は、以下2点にまとめられる。

第一に〈農〉に関係する諸論文・著書の研究をふまえて、論文「〈農〉の思想と新たな文明への哲学的視座」を執筆し、昨年度に引き続き、基礎的視座を提起することができたと同時に、新たな文明と〈農〉との結びつきを強調することができ、今後のより一層の探求に向けた大きなステップとなった。

第二に、その成果は、韓国哲学会によって招待されソウルで開催され環境哲学会国際学術大会にて発表し、国際的交流を深めることに資した。

第三に研究室所属の院生（東方沙由理、大倉茂、共に博士課程）とともに、〈農〉と環境教育の関係を専門に研究するAnette Schörner氏の協力のもとで北ドイツ・デンマークでの該当箇所について調査研究を行った。昨年度に引き続き、科研費テーマに沿った北ドイツ・デンマークならではの思想に裏打ちされた調査研究をすることができた。また、昨年度の南ドイツの調査結果を大倉が中心になって、調査報告として共著論文「ドイツにおける〈農〉の実践を巡る思想と環境教育」にまとめて雑誌『環境思想・教育研究』4号に掲載した。

以上、3点にまとめらる当該年度の具体的内容は、論文執筆に代表される理論研究によってテーマの手掛かりを得るとともに、その成果を国際大会で発表し、さらに北ドイツ・デンマーク調査研究においてその理論の可能性を実感でき、理論と実践を連携して研究をすすめるできたことに意義があると考えられる。ま

た、その理論と実践のかかわりを強調する一方、国際交流を進めることで、本研究の協働性に広がりが出てきたことが重要である。

〈平成 23 年度〉

当該年度は、持続可能な社会の構想の理論的、実践的な探求を前年度に引き続いて行ったが、〈農〉をめぐって生まれた新たな問題意識や問題圏が人類史における〈農〉の思想的文化的意義を踏まえた哲学アプローチを必要としているとの認識を一層深く確信した。

それを踏まえ、主要な課題として「〈農〉の思想」の現代的構築のための基礎的視座を探求することを目指して、理論的研究、調査研究を進め発表の機会を国際的、国内的にもった。また、当該年度が研究計画の最終年度となるため、これまでの研究成果をまとめる1年とした。具体的な内容は、以下2点にまとめられる。

第一に昨年度の韓国哲学会によって招待されソウルで開催され環境哲学会国際学術大会にて発表したことを踏まえて、2011年10月1日において、日本において日韓学術交流会を開催し、韓国の研究者2名に招待講演をしていただき、日本と韓国の研究者の国際交流を深めることができた。それを通じて、韓国の研究者との結びつきをより強くする契機となり、今後のより一層の交流に向けた大きなステップとなった。

第二に、当該年度が研究計画の最終年度であるため、これまでの成果を科研費報告書としてまとめた。これまでのヨーロッパを中心とする研究調査の実践に関わる報告とともに、それと密接に関係する理論研究にかかわる論文が多様な成果として報告することができた。

以上、2点にまとめられる当該年度の具体的な内容は、論文執筆に代表される理論研究によってテーマを深め、今後の展望を明らかにするとともに、その成果を国際的な学術交流会で共有することができた。国際交流を進めることで、本研究の協働性とネットワークに一層の広がりが出てきたことが重要である

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

① Shuji Ozeki, Questioning Modern Civilization from the perspective of

"Agriculture"

Journal of Environmental Thought and Education, 2010/12, (4):185-190

② 尾関周二 「〈農〉の思想と新たな文明への哲学的視座」 環境思想・教育研究、2010/12、(4):56-67

③ 尾関周二 「ドイツにおける〈農〉の実践をめぐる思想と環境教育」 環境思想・教育研究 2010/12、(4):214-217

④ 尾関周二 「環境哲学と脱近代文明への視座——〈農〉を基礎にしたエコロジー文明」 Environmental Philosophy Official Journal of the Korean Society for the Study of Environmental Philosophy (Korea) 2010/10、10:143-167

⑤ 尾関周二 「農の思想から近代文明を問う」 人権 21 : 調査と研究、2010/10、(208):17-24

⑥ Shuji OZEKI "Kosei"between Human and Nature and "Artificial",環境思想・教育研究 2009/12、(3):96-98

⑦ 尾関周二 「〈農〉の思想と持続可能な社会」 環境思想・教育研究、2009/12、(3):51-61

[学会発表] (計 5 件)

① 尾関周二 「近代文明を超えてエコロジー文明へ——農の人類史的意義と持続可能な社会」 総合人間学会談話会、2011/09/24

② 尾関周二 「孤立化からつながり合いへ——情報化社会における人間らしいコミュニケーションを求めて」 風の会、2011/03/06

③ 尾関周二 「環境哲学と脱近代への視座——〈農〉を基礎にしたエコロジー文明へ向け て 」 International Environmental Philosophy Conference Seoul, 2010/12/11

④ 尾関周二 「環境人間学——環境問題への「人間学的」アプローチ、東洋大学「エコ・フィ

ロソフィア」学際研究イニシアティブ、  
2010/10/23

⑤尾関周二「共生理念と持続可能社会の構築」第二回日中哲学フォーラム、遼寧大学、  
2009/04/26

〔図書〕（計 2 件）

①尾関周二他編著『〈農〉と共生の思想——  
〈農〉の復権の哲学的探求』 農林統計出版社、2011/10

②尾関周二他編著『共生、共同、連帯の未来』 青木書店、2009/08

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

尾関 周二 (OZEKI SHUJI)  
東京農工大学・大学院農学研究院・教授  
研究者番号：00114819

### (2) 研究分担者

澤 佳成 (SAWA YOSHINARI)  
弘前大学・教育学部・講師  
研究者番号：70610632

上柿 崇英 (UEGAKI TAKAHIDE)  
鹿児島大学・産学官連携推進機構・特任講師  
研究者番号：20552623